

Eureka VII

六年制通信 No.37 令和3年3月12日(金)号

桜の蕾ふくらむ

毎年この時期になると、つまり君たちで言えば卒業シーズン、私たちなら退職ですが、頭の中に「花は愛惜(あいじゃく)に散る」という言葉が出てきます。これは道元禅師の言葉です。鎌倉時代の僧で曹洞宗の開祖です。君たちも福井の永平寺の名は聞いたことがあるでしょう。あそこで只管打坐を実践したわけです。ひたすら座禅をする修行です。道元の書いた『正法眼蔵』は講談社学術文庫(一)~(八)にあります。その第一巻の「現成公案」、文庫では41ページにこうあります。「華は愛惜にちり、草は棄嫌(きけん)におふるのみなり」と、つまり「花は惜しんでも散りゆき、草は嫌でも繁りはびこるものと知る」という意味です。そこから、「花は愛惜に散る」を仕事は長く続けて嫌われるよりは惜しまれて辞めるくらいがいいのだという意味に使うのですが、たいていは、あんた今辞めたら惜しまれるとでも思ってるの? ずっと前から早く辞めろと思われていますよ、というオチがつくわけです。

つい先日、生徒の名前を読み間違いました。表彰状を授与する時なのですが、10秒前に確認したのに振り向いて名前を読んだら違ってたと、これ、老いですよね。

「鬼滅の刃」でしたか、ちっちゃい竹を咥えた女の子を救う話らしいのですが、それの何が面白いのかさっぱりわからない。最初この子は何で竹輪なんて咥えてるんやろと思ったし、竈門炭治郎は「かまどすみじろう」と読んでいたし、従って炭屋の子どもかいなと…。ま、これも老いですかね。テレビで気に入らないニュースや発言があると、一人でツッこんでいますが、これも老いの特徴らしいですね。さらに最近、温水洋一という役者さんが私の四つ下だと知りまして、ずいぶん自分が歳をとったように感じました。温水さんには悪いけど、遥か年上と勝手に想像していたので。老いを感じると早く隠遁生活に入って理想とする晴耕雨読、といっても私は畑仕事(に限らず力仕事)はできないので晴雨とものんびり本でも読んで静かに穏やかに暮らしたいと思うのですね。もちろん携帯電話は番号を変えるか破棄するか、誰からもかかってこないようにする、いやいやそんなことをすると寂しいですよと忠告する人もいますが、とてもそうは思えない。

ああ、早く辞めたいなあと思いながら堤防沿いを散歩していると、桜の蕾が膨らんでいました。桜はコロナ禍にあってなお、春の準備をしています。春を spring と言いますが、泉も spring、バネも spring、そうすると spring に込められた感じがよくわかります。日本語で言う「すくすく育つ」の「すくすく」の感覚に近いのでしょうか。何かが弾むように成長する、そういう感じがあります。その成長は何も植物に限

るものではなく、当然私たち、とりわけ若い君たちも含まれているのです。春を迎えて、君たちは泉のようにバネのように一回りも二回りも成長してほしいと、桜の蕾を見ながらそう思っていました。コロナ禍のはじめ、学校の入学を9月にすればという議論がありましたが、膨らんだ蕾を見てやはり別れと出会いはこの時期がふさわしいと思います。日本人はこの季節が好きなのですね。大和心とは何かと問われた宣長の答えは「それは朝日に色が染まっていくあの美しい山桜の花さ」と答えています（敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花）。

さて、春から iPad を導入します。時代の要請です。ただし、こういう教育機材を導入したからといって、これからの勉強が「時短」になるわけではありません。便利なツールは、1時間かかったものを30分でできるようにしてくれるかもしれませんが、どういうわけか私たちは相変わらず忙しいままです。勉強は、何を使うにしても辛抱強く時間をかけて学ぶ以外にありません。私たちが学んでいくスピード、何かを身につけていくスピードは器材のスピードとは関係ありません。5倍のスピードで朗読を聴いても何もわからない。人間の理解力とはそういうものです。

ちなみに「機械有る者は、必ず機事有り。機事有る者は、必ず機心有り」という言葉があります。2千3百年以上も前の荘子の言葉です。（『新釈漢文大系8』の382ページ参照）。意味は「機械を持てば、機械によるしごとが必ず出てくるし、機械を用いるしごとが出てくると、機械に捉われる心が必ず起きる」ということです。私はこれを「機械に使われるな」という意味に解釈しています。機械に使われるとは、機械がなければ何もできないような心理状態になることです。文明の利器は電気が止まったらたいいお仕舞いですから、案外脆弱なものです。それがなかったら何もできなくなるくらい機械に依存してはいけません。勉強は基本的に器材がなくてもできるのですから。皆さんもよくよくこのことに注意を向けて下さい。

今週のおすすめ

・近藤唯之 『勝負師語録』 （新潮文庫）

スポーツ・プロフェッショナル名セリフ集です。ただ、単行本として昭和63年に出版されているので、登場する70名を超えるアスリートの現役時代を君たちは何も知らないでしょう。ま、その分、好き嫌いなしに読めるんじゃないかな。私の好きなのは、原田哲夫という剣道の全日本覇者。「10年かけてこの男を倒そうと、ひそかに剣を磨いていました」という言葉。相手は天才加治屋速人、名前からして速そうですね。京都府警の道場で子ども扱いをされて以来、加治屋の試合があれば見に行き研究します。追っかけ、あるいはストーカーです。そして、昭和59年、全日本の決勝で両者は戦います。しかし、これだけ執念深く研究されたのなら、された方も、たとえ試合に負けたとしても、以て瞑すべしですね。

野球、相撲、陸上、ゴルフ、ラグビーボクシングなど、彼らの言葉には何かしら君の琴線に触れるものがあると思いますよ。図書館に入れておきます。

BGMは アリス の 遠くで汽笛を聞きながら でした…。